

2030 アジェンダ・SDGs を自分事化するためのツールの開発 第 2 報 SDGs レンズ

Development of a tool that facilitates self-inclusion within the 2030 Agenda for Sustainable Development and SDGs 2 – SDGs Lens

村山史世*, 渡邊菜乃花**

MURAYAMA Fumiyo*, WATANABE Nanoka**

*麻布大学 生命・環境科学部 講師, **麻布大学 生命・環境科学部 4 年

〔要約〕 国連が 2015 年に採択した「私たちの世界を変革する 持続可能な開発のための 2030 アジェンダ (2030 アジェンダ)」の中核である「SDGs (国連持続可能な開発目標)」の認知度は高まっている。しかし、その自分事化、すなわち「SDGs と自分との関係を理解すること」は依然として課題である。

SDGs の自分事化においても、SDGs の理解フェーズや、SDGs の当てはめフェーズに留まっているものが多い。当てはめフェーズに留まっていたり、自分たちとステークホルダーやシステムとの関係性を問い直すことも、ステークホルダーやシステムに働きかけて自分たちから「私たちの世界を変革する」ことなどは意識されていない。「チェリーピッキング」や「SDGs ウォッシュ」は当てはめフェーズで生じる。

そこで本研究では、ある課題と SDGs の各ゴールとの関係性と、その課題と自分自身との関係性を認識し、問い直すことを目的とした SDGs の自分事化のツールである「SDGs レンズ」とその活用手法を開発した。

〔キーワード〕 2030 アジェンダ, SDGs, 自分事化,

1. はじめに

SDGs の認知度は高まっている。しかし、SDGs は理解できても、SDGs を自分たち自身の問題に関係づけて見直し、次の行動につなげることは難しい。「SDGs と自分との関係を理解すること」すなわち「SDGs の自分事化」は依然として課題である。

SDGs の自分事化には様々なフェーズがある¹。SDGs の存在を意識するフェーズ、SDGs の内容を理解するフェーズ、SDGs の各ゴールを自分たちに当てはめるフェーズ、そして、自分たちの活動を各ゴールに当てはめるフェーズに留まっているものが多い。当てはめフェーズで生じやすいのが、自分たちにとっての優先順位の高さではなく取組みやすさで

SDGs のゴールを選択する「チェリーピッキング」や、自分たちの SDGs への積極的な貢献のみを報告し重大な負のインパクトを無視する「SDGs ウォッシュ」²である。SDGs の 17 のゴールの相互関連性・不可分割性・統合性を意識していないからである。

当てはめフェーズを超えて、SDGs を活用してステークホルダーやシステムとの関係を問い直しながら、「ありたい姿」に向けて自分たちを変革しつつ、他者やシステムに働きかけて世界を変革することこそ、SDGs が本来目指すものである。しかし、「ステークホルダーやシステムとの関係を問い直す」必要性は認識できても、実際に「どのように問い直したら良いか」について定説があるわけではな

い。そのため、多種多様な手法が開発されている。村山・石井他（2019）は、市民や企業、高校生・大学生や行政職員を対象に実践したSDGsの自分事化ワークショップを報告している。そこでは村山・相場（2017）が開発した「SDGs おでん」を活用した独立行政法人環境再生保全機構の職員向けワークショップも報告されている。

これまでの研究・実践を踏まえて、本稿では、ある課題とSDGsの各ゴールとの関係性と、その課題と自分自身との関係性を認識し、問い直すためのツールである「SDGs レンズ」とその可能性を論じる。

2. SDGs の普遍性と固有性

SDGs は国連が採択した「私たちの世界を変革する 持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の一部である。

2030 アジェンダの 55. によると、SDGs は「一体で分割不能なものである。また、各国の置かれたそれぞれの現状、能力、発展段階、政策や優先課題を考慮しなければならないが、地球規模かつすべての国に対応が求められる性質のものである」としている。また 71. は「我々は、実施手段を含む本アジェンダおよびSDGs とターゲットは、普遍的で、分割不能で、相互に関連していることを再度強調する」とある。ここにおいて 2030 アジェンダは三つのことを含意している。第一にSDGs の 17 のゴールは相互に関連しており、一体的で分割不能な構造を有していること、すなわちSDGs の構造の普遍性を示している。第二に、SDGs の構造は普遍的であっても国や地域ごとに 17 のゴールに関する課題や資源に固有性があることである。そして第三に、国や地域の固有性に配慮しつつも、地球規模ですべての国や地域で対応しなければならないことである。

SDGs の構造が普遍的であり、SDGs に関連した課題や資源の顕れ方に固有性があるとした

ら、その固有性を国や地域ごとに把握・理解しなければならない。課題や資源の固有性を理解して、ありたい姿を実現するための課題解決や資源活用方法を構想することが、「SDGs の自分事化」であり、地域ごとにアジェンダ（行動指針）を策定・実施するための過程である。そして、SDGs の普遍性と国や地域ごとの課題や資源の固有性を認識しながら、国や地域ごとに持続可能な方向に「私たちの世界を変革する」ことはすべての国や地域での対応が求められている。

3. SDGs おでんと SDGs レンズ

自らの課題や現状をSDGsのゴールに関連づけて、その相互関連性を可視化し、自らのアジェンダとビジョンを構築して自分事化するワークシートが「SDGs おでん」である。

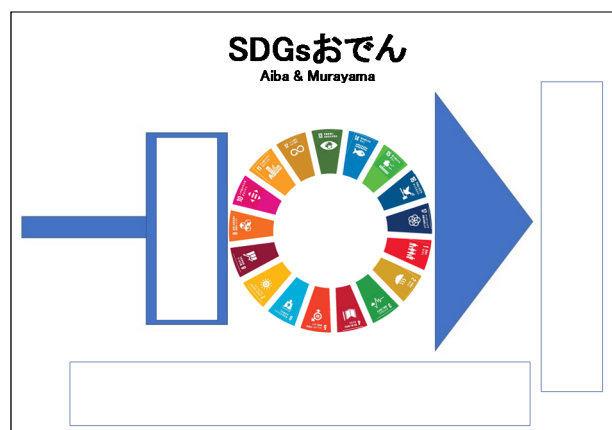


図 1 SDGs おでん

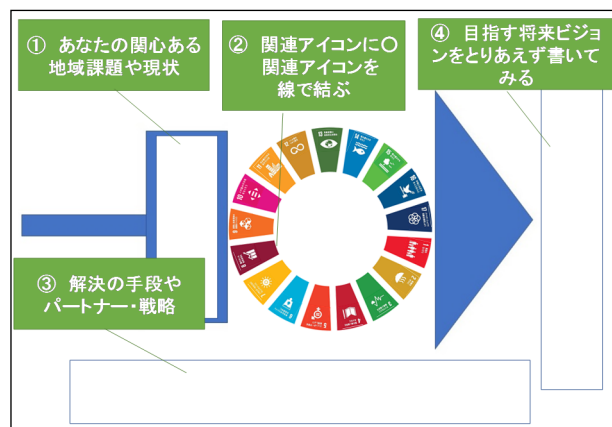


図 2 SDGs おでんの手順

SDGs おでんは、自分たちの課題認識や現状認識をアジェンダづくりやビジョン構築につなげることを目的としている。

しかし、アジェンダやビジョンを策定する前に、まず現実の課題を SDGs の 17 のゴールに関連づけてその課題の相互に関係した複雑な構造を理解すること、そしてその課題と自分自身との関係性を認識し、問い直すことを目的としたツールや手順が必要である。「ありたい姿」を構想するには問い直しが必要であり、問い直しのためには課題や自己の意識や行動を直視しなければならないからである。そこで開発したのが SDGs レンズである。



図 3 SDGs レンズ

SDGs レンズは、拡大鏡の周りに SDGs のアイコンを貼り付けたものである。

SDGs レンズは第一に現状把握のツールである。SDGs レンズを通して現実の課題や資源を見る³ことで、その課題や資源と SDGs の関係性を考えること、そして課題と関連する SDGs のゴール相互の関連性を認識することが可能となる。すなわち「つながりの可視化」によって課題や資源の関係性や構造の把握が可能となる。

一例として、川のプラごみを SDGs レンズで見るとする。そのごみは水を汚し（ゴール 6）、川の生態系（ゴール 15）や海の生態系（ゴール 14）にも影響を与える。さらに、ごみの元となる製品の生産者の責任も消費者の責任（ゴール 12）も問題となる。生産者や消費者

が責任ある行動を選択するためには ESD（ゴール 4）が重要となる。このように川のプラごみは、SDGs の様々なゴールと関係しているし、それらのゴールも相互に関連した複雑な構造として顕在化している。

SDGs レンズは第二に自分事化のツールである。SDGs レンズを通して現実世界を見ることは、逆に現実世界から自分たちも見られていることでもある。見られている自分に気づくことで、自分自身も現実世界の一員であることを自覚できる。この時、レンズは鏡となる。そして自分たちと他者との関係性やシステムのあり方を問い直し、主体的に現実社会に働きかける意欲を持つことが可能となる。川のプラごみの例で言えば、課題解決のための ESD・環境教育の実施や消費行動の改革の呼びかけ、ごみ拾いイベントへの参加や川での自然観察会や環境保全活動など、他者やシステムに働きかける様々な行動を構想できるようになる。

このように SDGs レンズは課題や資源と SDGs のつながりを可視化し、それらと自分自身のつながりを自覚させることで、持続可能性にむけた主体的な行動を喚起することが可能となる。当てはめのフェーズを超えて、ステークホルダーやシステムとの関係を問い直し、働きかけるフェーズにおける「SDGs の自分事化」でも活用が可能である。

4. SDGs レンズの可能性

SDGs レンズは現実の課題や資源と SDGs、そして自分たちのつながりを可視化するツールなので、ワークショップでのアクティビティやアイスブレイクなど、様々な局面で活用が可能である。

図 4 は高校 1 年生向けの模擬授業で使用した SDGs レンズのワークシートであり、図 5 は実際に高校生が書き込んだ記入例である。



図 4 SDGs レンズの活用例

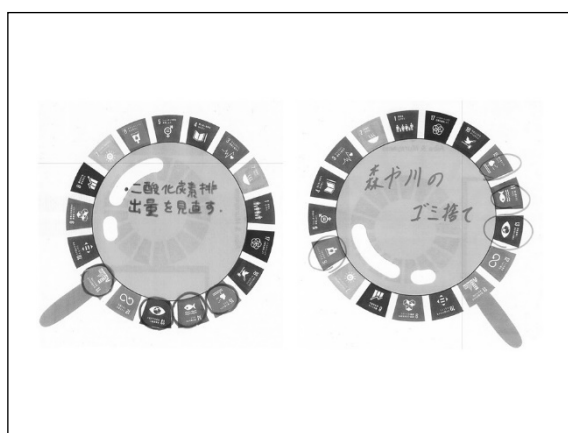


図 5 SDGs レンズの記入例

時間の関係で「課題の構造」の項目までは記入できなかったが、CO₂排出量や森や川でのゴミ捨てなどの課題とSDGsのゴールとの関連性を認識することはできた。

SDGsはワークショップの目的に応じ自由自在に活用することも可能である。拡大鏡だけでなく望遠鏡の比喻を加えることも可能である。現在だけでなく、過去を省みるツール、未来を描くツールとしても活用できる。また岡本（2015）の言う「つながりの目」を補助するツールとしても活用できる。

SDGs レンズは、SDGsの自分事化の様々なワークショップでさらに開発されてゆくことだろう⁴。

謝辞

SDGs レンズは、著者と麻布大学生命・環境科学部環境科学科の学生である小稲香穂（4年）・杉森天真（3年）・山林亮太（2年）・

三橋晴香（2年）との議論と共創の成果である。また有益なコメントを寄せてくれた石井雅章（神田外語大学）、畑正夫（兵庫県立大学）、滝口直樹（合同会社環境活動支援工房）、長岡素彦（一般社団法人地域連携プラットフォーム）の諸氏に感謝する。

引用文献・参考文献

- 岡本弥彦，2015，「『つながりの目』で”みる”ことー自然の事物・現象をシステムでとらえることから持続可能性を視野に入れてー」『理科の教育』 747: 5-8
- グローバル・レポーティング・イニシアチブ（GRI）・国連グローバル・コンパクト著，公益財団法人地球環境戦略研究機関（IGES）翻訳，2019，『SDGsを企業報告に統合するための実践ガイド』
- 村山史世・石井雅章・陣内雄次・高橋朝美・滝口直樹・長岡素彦・村松陸雄，2019，「2030 アジェンダ・SDGsを理解し，自分事化するためのワークショップの実践ー6つの事例と自分事化のフェーズ」『武蔵野大学環境研究所紀要』 8: 47-65
- 村山史世・相場史寛，2018，「2030 アジェンダ・SDGsを自分事化するためのツールの開発」『日本環境教育学会関東支部年報』 12: 33-36
- 村山史世・滝口直樹，2018，「自治体・地域づくりから見た2030 アジェンダ・SDGsの可能性についての予備的考察」『武蔵野大学環境研究所紀要』 7: 73-88

¹ 村山・石井他（2019）48-49 参照。

² グローバル・レポーティング・イニシアチブ・国連グローバル・コンパクト（2019） 7.

³ 見る対象となる課題や資源は具体的な事物や現象でも，抽象的な概念でも構わない。

⁴ 希望者にはSDGs レンズのワークシートは提供したい。希望者は，murayama@azabu-u.ac.jp（村山）までお問い合わせください。